

研究成果要旨

研究テーマ	母性看護学実習において分娩見学時に学生が受けるストレスと気分の変化
研究組織	研究（代表）者： 日本赤十字秋田看護大学 助教 佐藤紘子 共同研究者：
キーワード	母性看護学実習、分娩見学、ストレス、唾液アミラーゼ活性値、POMS2 日本語短縮版

研究報告

(1) 研究の背景・目的

近年の社会構造の変化に伴い、少子化・核家族化の影響からマタニティサイクルにある女性や新生児と接した経験のある学生は乏しい現状にある。本研究は母性看護学実習において初回の分娩見学が看護学生に与える影響についてストレス度および感情の変化の側面から示唆を得ることを目的とした。

(2) 研究方法

母性看護学実習において初回分娩見学の機会を得た看護学部3～4年生に対し、唾液アミラーゼ活性値（以下 α -AMY）測定およびPOMS2日本語短縮版検査を実施した。 α -AMYは3回（受け持ち開始時、子宮口全開大前後、分娩後2時間）、POMS2日本語短縮版検査は2回（受け持ち開始、終了後）実施し、単純集計およびt検定、感情の7尺度を算出し、TMD得点を算出した。

(3) 研究結果

8名の α -AMY平均値は受持ち開始時 9.3 ± 11.9 KU/L、子宮口全開大時 12.8 ± 9.9 KU/L、分娩後2時間 15.4 ± 12.6 KU/Lを示し、それぞれ「ストレスがない」状態を示した。また各期における対象者の感情尺度は全て「平均的」な状態を示した。最も高値であったものは、分娩前【緊張-不安】 57.5 ± 13.6 、分娩後【友好】で 56.6 ± 7.3 であった。対象者のネガティブな感情を示すTMD得点は分娩前 48.3 ± 12.3 、分娩後 48.4 ± 10.5 で「平均的」であった。

(4) 考察

丸山（2015）によれば、唾液中に含まれるアミラーゼは、精神的ストレスに加えて中等度以上の運動により上昇が認められている。受持ち開始から順調に分娩に至り、分娩第I期の経過が正常かつ順調に進行し児が娩出されたことから、対象者は肉体的・精神的ストレス負荷が低い状態であったと示唆される。また見学前後における感情の変化は、分娩後に否定的感情が上昇した者と、肯定的感情が上昇し

た者が存在した。本多（2006）は、分娩見学体験は分娩を肯定的に感じられる体験であり、分娩に前向きに取り組む産婦とそれを支援する家族の姿であり、生まれ出た新生児への母性愛、生命誕生の感動であると述べる。分娩見学の受け止め方は学生個人がもつパーソナリティによる影響が大きく、肯定的体験としての意味づけを行うことが重要であると示唆される。

（5）結論

学生の分娩見学前後におけるストレス度は概ね「ストレスがない」状態であり、見学前後における学生の感情の変化や反応は多様であることから、個々に状況に応じた精神的支援が重要である。

（6）謝辞

本研究にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。本研究は「学校法人 日本赤十字学園教育・研究及び奨学金基金（平成 28 年度・平成 29 年度）」により助成を受け実施した。

（7）引用文献

丸山総一郎. (2015). ストレス学ハンドブック (pp61). 創元社.

本多洋子. (2006). 分娩見学の学びの分析. 桐生短期大学紀要, 17, 209-214.